

中国法書選

11

魏·晋·唐小楷集

魏·晋·唐

二玄社

中国法書選
11

魏・晋・唐
小楷集

魏・晋・唐

二玄社

は、外に裱武を震わせり、其の拳々たるを度れば、一計有る無く、高（尚）に自ら疏せり。

尚書宣示孫權所求詔令所執所以博示
 還于卿佐必異良方出於阿是多羨之
 言可擇郎廟况繇始以疏賤得為前恩橫

尚書孫權の求むる所、詔令の報ずる所を宣示するは、博く示して、卿佐に逮ばせば、必ずや良方の阿是より出て、芻蕘の言の廊廟に択はる可きを冀う所以なり。況んや繇始め疏賤を以て、前恩の横に「盱眙する所」と為るを得たり。

所貶睨公私見異愛同骨肉殊遇厚寵以至
 今日再世榮名同國休感敢不自量竊致愚
 慮仍日達晨坐以待旦退思鄙淺聖意所
 棄則又割意不敢獻聞深念天下今為已平
 權之委質外震神武度其拳々無有二計高

公私に異を見わすも、愛骨肉に同じくせられ、殊に厚寵に遇せらる。以て今日に至り、再世に策名し、同國に休感すれば、敢えて自ら量らず、窃かに愚慮を致す。仍日
 晨に達し、坐して以て旦を待つも、退きて鄙淺を思う。聖意の棄つる所、則ち又た意を割きて、敢えて獻聞せず。深く天下を念するに、今已に平と為る。權の委質せる
 は、外に神武を震わせり。其の拳々たるを度れば、二計有る無く、高(尚)に自ら疏せり。

況んや未だ信ぜられざるに、今款誠を推し、信ぜ見るるを求めんと欲す。実に自ら信ぜざるの心を懐けり。亦た宜しく之を待つに信を以てするべし。而して当に其の未だ自ら信ぜざるを護るべき也。其の求むる所の者は、許さざる可からず。之を許して反すも、必ずしも与う可からず。之を求めて許さざれば、勢として必ず自ら絶たん。許して与えざれば、其の曲は己に在り。里語に曰く。何を以て罰せん、之を与えて奪わん、何を以て怒らん、許して与えず、と。示す所を思省するに、

尚自踪况未見信今推款誠欲求見信實懷

不自信之心亦宜待之以信而當護其未自信

也其所求者不可不許之而反不必可與求之

而不許勢必自絶許而不與其曲在己里語

曰何以罰與以奪何以怒許不與思省所示報

權蹠曲折得冥、神聖之慮非今臣下所能
 有增益昔與文若奉事先帝事有要者
 有似於此粗表二事以爲今者事勢尚當有
 所依違、願君思省、若在所慮可不須復與
 節度、唯君思不可采、故不自拜表

權の疏の曲折に(報じて)宜しきを得たり。宜しく神聖もて之を慮るべくんば、今臣下の能く増益を有する所には非ず。昔文若と先帝に奉事し、事数しほすること有る者、此に似たる有り。二事を粗表し、以爲えらくは、今者事勢、尚お当に依違せる所有るべし。願わくば君思省せられよ。若し慮る所に在るを以てすれば、復た節度を完うするを須いざる可けんや。唯だ君恐るらくは采る可からず。故に自ら表を拜せず。

繇白昨跡還示知憂虞復深遂積

疾苦何迺爾耶蓋張樂於洞庭之野

鳥值而高翔魚聞而深潛豈繇磬之

響音雲英之奏非耶此所愛有殊所樂

迺異者能審已而恕物則常無所結

繇白す。昨跡して還示す。憂虞の復た深く、遂に疾苦を積むを知る。何ぞ迺ち爾る耶。蓋し樂を洞庭の野に張れば、鳥は値いて高く翔び、魚は聞きて深く潛む。豈に糸磬の響き、雲英の奏の非なる耶。此れ愛する所殊なる有れば、樂しむ所迺ち異なるなり。君能く己を審らかにして物を恕せば、則ち常に結滯する所無からん矣。鍾繇白す。

滯矣鍾繇白

白騎遂内書不俟車駕計吳

人權道情懷急切當以時月

待取伏罪之言盖不以疑相府小

緣心吞若八九

白騎遂に書を内る。車駕を俟たず。計るに 吳人權は、情懷の急切なるを道う。當に時月を以て待ち、伏罪の言を取るべし。蓋し以て相府を疑わず、小緣の心吞むは八九の若し。

弟常患常
 言傲損遇
 寒進口物
 多少新婦
 動心仰人

弟は常に患い常に羸頓す。寒に遇う。口に進む物多少ぞ。新婦の動止は人に仰ぐ。

魏鍾繇賀捷表

魏鍾太傅賀捷表 唐本

臣繇言戎路兼行履險冒寒
以無任不獲扈從企佇懸情
有寧舍即日長史還充宣示令

臣繇言す。戎路兼行し、險を履み寒を冒す。臣は任する無きを以て、扈從するを獲ず。企佇して情を懸くるも、寧舍有る無し。即日長史、宣示令に充てられるに速び、

命じて征南將軍に知す。田單の奇を運らし、憤怒の衆を癘まし、徐晃と勢を同じくし、力を并せて撲討し、表裏俱に進ましむ。時に応じて剋捷し、凶逆を滅滅す。賊師
 関羽、已に矢刃を被り、傳方反覆し、胡脩恩に背く。天道淫に禍いし、厥の(命を)終えざらしむ。

命知征南將軍運田單之奇癘
 憤怒之衆與徐晃同勢并力撲
 討表裏俱進應時剋捷滅凶
 逆賊師關羽已被矢刃傳方反
 覆胡脩背恩天道福淫不終



命奉聞嘉嘉喜不自勝望路
 笑踊躍逸豫臣不暇欣慶謹拜
 表因便宜上聞臣繇誠惶誠恐
 頓首頓首死罪死罪

建安廿四年閏月九日南蕃東武高侯臣繇上

嘉意を奉聞して、喜びに自ら勝えず。路を望んで(載ち)笑う。踊躍逸豫す。臣は欣慶に勝えず。謹んで表を拜し、便宜に因つて上聞す。臣繇誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪。建安二十四年閏月九日、南蕃東武亭侯・臣繇上る。

鍾繇 関内侯季直を薦むるの表。
 臣繇言す。臣先帝に遭遇せし自り、忝くも腹心に列せらる。爰に建安の初め、王師賊を関東に破りし時自り、年荒れ穀貴く、郡县残毀す。三軍の餽饌は、朝夕に及ばず。先帝の「神略奇計は」

書 鍾 繇 表

鍾繇薦関内侯季直表

内 侯

臣繇言臣自遭遇先帝三列

腹心爰自建安之初王師破賊

関東時年荒穀貴郡县残

毀三軍餽饌朝不及夕先帝

朱 芾

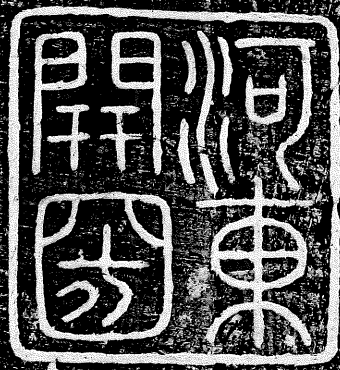
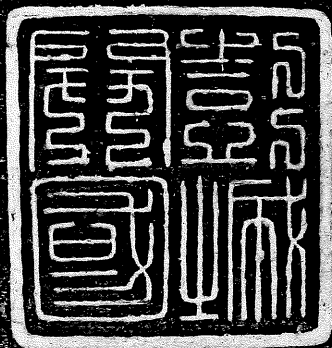
魏 氏 鍾 繇

真 賞 齋 印

神略奇計委任得人深山窮谷
 巨獻米豆道路不絕遂使強
 敵喪胆我衆作氣旬月之間廓
 清蟻聚當時實用故山陽太守
 關内詹季直之策尅期成事
 不差豪髮先帝賞以封爵授
 以劇郡今直罷任旅食許下
 素為廉吏衣食不充臣愚欲

任を委ぬるに人を得たり。深山窮谷も、民米豆を献して、道路に絶えず。遂に強敵をして胆を喪い、我が衆をして氣を作さしめ、旬月の間にして、蟻聚を廓清せり。当時は表に故の山陽太守・関内侯季直の策を用い、期を尅めて事を成し、毫髪をも差わず。先帝賞するに封爵を以てし、授くるに劇郡を以てす。今直は任を罷め、許下に旅食す。素より廉吏為れば、衣食は充たず。臣愚欲(望)するに、

聖徳もて其の旧勲を録し、其の老困を矜れみ、一州を復せ俾め、報効を圖ら俾めよ。直は力氣尚お壮なり。必ず能く夙夜人民を保養せん。臣は國家の異恩を受く、敢えて雷同せず。事を見て言わざれば、宸殿を干犯せん。臣繇 皇恐皇恐、頓首頓首、謹んで言す。 黄初二年八月日、司徒・東武亭侯・臣鍾繇表す。



望聖徳録其舊勲矜其老
 困復俾一州俾圖報効直
 力氣尚壯必能夙夜保養人
 民臣受國家異恩不敢雷同見
 事不言干犯宸殿臣繇皇

恐頓首謹言



黄初二年八月日司徒東武亭侯臣鍾繇表



墓田丙舎欲使一孫於城西一孫
 於都尉府此絲家之嫡正之良者
 也兄弟共哀異之哀懷傷切都尉
 文岱自取禍痛賢兄慈篤情無
 有已一門同愼助以妻愴如何

義之臨鍾絲帖



墓田の丙舎 一孫をして城西よりし、一孫をして都尉府よりせ使めんと欲す。此れ絲が家の嫡正の良なる者也。兄弟共に哀しむ。之を異とす。哀懷傷切なり。都尉文岱も、自ら禍痛を取る。賢兄慈篤にして、情已む有る無し。一門 同に愼れみ、助くるに悽愴を以てす。如何 如何。

臣繇言臣力命之用以無所立惟幄之謀而又

愚老聖恩位個待以殊禮天下始定帥士欣

戴唯有江東當少留思既與上公同見訪問昨

讌見復蒙逮及雖緣詔令陳其愚心而臣所

臣繇言す。臣が力命の用、以て帷幄の謀を立つる所無く、而して又た愚老なり。聖恩低個し、待つに殊礼を以てす。天不始めて定まり、帥士欣戴するも、唯だ江東の當に少しく留思すべき有るのみ。既に上公と、同に訪問せらる。昨讌見し、復た逮及を蒙る。詔令に緣り、其の愚心を陳ぶと雖も、而して臣が懐う所は、

懷造膝之事昔先帝嘗以事及臣遣侍中王

祭杜靛就問臣臣所懷未盡冀益絲髮乞使

侍中與臣議之臣不勝愚款悽々之情謹表以

聞臣繇誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪

造膝の事なり。昔先帝嘗に事を以て臣に及び、侍中王祭・杜靛を遣わし、就きて臣に問わしむも、臣の懷う所は未だ尽くさず。冀わくは糸髮を益し、侍中をして臣と之を議せ使めんことを乞う。臣は愚款、悽々の情に勝えず。謹んで表し以て聞す。臣繇誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪。

世人多く樂毅が時に莒と即墨とを抜かざるを以て（劣れりと為す。是を以て叙して之を論ず。夫れ古賢の意を求むるは、宜しく大なる者遠き者を以て之を先とすべし。必ず迂廻して通じ難ければ、然る後に焉を已むるは可也。今樂氏の趣、惑いは其れ未だ尽くさざる乎。而して多く之を劣るとするは、是れ前賢をして指を将来に失せしむ。亦た惜しからず哉。樂生が燕の惠王に遺るの書を觀るに、其れ殆ど

世人多不時拔莒即墨

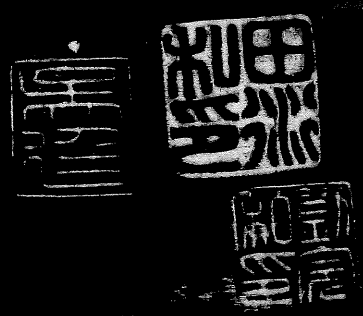
論之

夫求古賢之意宜以大者遠者先之

而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其

未盡乎而多方之是使前賢失指於將來

不之惜哉觀樂生遺燕惠王書其殆庶乎



機合乎道以終始者與其喻昭王曰伊尹放
 大甲而不疑大甲受放而不怨是存大業於
 至公而以天下為心者也夫欲極道之量務以
 天下為心者必致其主於盛隆念其趣於先
 王苟君臣同符斯大業之矣于斯時也樂生
 之志千載一遇也夫特行千載一隆之道豈其

機道に合して、以て終始する者に「庶からん乎」。其の昭王に喩して曰く、伊尹、大甲を放ちて疑わず、大甲放を受けて怨まず。是れ大業を至公に存し、而して天下を以て心と為す者也。夫れ道の量を極め、務めて天下を以て心と為さんと欲する者は、必ず其の主を盛隆に致し、其の趣を先王に合す。苟しくも君臣符を同じくすれば、斯に大業定まれり矣。斯の時に于いて也、樂生の志は、千載一遇也。亦た將に千載一隆の道を行なわんとす。豈に其れ



局蹟當時止於兼并而已哉夫兼并者非

樂生之所屑彊燕而廢道又非樂生之所求

也不屑苟得則心無近事不求小成斯意無

天下者也則舉齊之事所以運其械而動四

海也夫討齊以明燕主之義此兵不興於為

利矣圍城而害不加於百姓此仁心著於遐

當時に局蹟して、兼并するに止まる而已ならん哉。夫れ兼并なる者は、樂生の屑しとする所に非ず。又た樂生の求むる所に非ざる也。苟得を屑しとせざるは、則ち心事に近づく無く、小成を求めざるは、斯ち意天下を兼ねんと思ふ者也。則ち齊を擧ぐるの事は、其の機を運らして四海を動かす所以也。夫れ齊を討ちて以て燕主の義を明らかにするは、此れ兵利の爲に興さざるなり矣。城を圍みて害を百姓に加えざるは、此れ仁心の遐(邇)に著るなり(矣)。

通矣舉國不謀其功除暴不以威力此至德
 全於天下矣邁全德以率列國則樂於湯
 武之事矣樂生方恢大綱以縱二城收民明
 信以待其弊使即墨莒人願仇其上願釋于
 戈賴我猶親善守之智無所之施然則求
 仁得仁即墨大夫之義也任窮則從微子適

国を挙げて其の功を謀せず、暴を除くに威力を以てせざるは、此れ至徳を天下に全うするなり矣。邁めて徳を全うし以て列国を率いば、則ち湯武の事に幾し矣。樂生
 方に大綱を恢にし、以て二城を縱し、民を牧すること明信にして、以て其の弊るるを待ち、即墨・莒の人をして仇を其の上に顧み、干戈を収かんことを願ひ、我に頼る
 こと猶お親のごとくなら使めば、善守の智も、之を施すに所無からん。然れば則ち仁を求めて仁を得るは、即墨大夫の義也。任窮すれば則ち従う、微氏が〔周に〕適く〔の
 道也〕。

弥広ひろの路みちを開いて、以て田單でんたんの徒とを待ち、善ぜんを容ゆるめるの風かぜを長ながじて、以て齊士せいしの志こころを申まをべ、夫そのの忠ちゆうなる者は節せつを遂とげ、通つうずる者は義ぎ著あわれ、之これを東海とうかいに昭あらかにし、之これを華裔かえいに属およぼせば、我が沢たくは春はるの如ごとく、下しもの応おこずること草くさの如ごとく、道みちは宇宙うちうを光あらし、賢者けんぢやは心こころを託たくし、隣国りんこくは傾慕けいぼし、四海しかいは頸くびを延のべて、燕主えんしゆを戴たかんと思おもわん。
 仰あおいで風声ふうせいを望のぞみ、二城にじやう必ず従したがわば、則ち王業おうぎやく隆たかんならん。兩邑りやういつに淹留えんりゆうすと雖なも、乃ち天下てんかを速まくことを致いたさん。

周之道也開彌廣之路以待田單之徒長容

善之風以東齊士之志使夫忠者遂節通者

義普昭之東海屬之華裔我澤如春下應

如草道光宇宙賢者託心鄰國傾慕四海

延頸思戴燕主仰望風聲二城必從則王業

隆矣雖淹留於兩邑乃致速於天下不韋

之變世所不蓄敢於垂成時運固然若乃逼

之以威劫之以兵則攻取之事求欲速之切使

燕齊之士流血於二城之間侈教傷之殘示

四國之人是縱暴易亂貪以成私鄰國望之其

猶豺虎既大墮稱兵之義而喪濟弱之仁

虧齊士之節廢廉善之風掩宏通之度棄

〔不幸〕の變は、世の凶らざる所なり。成るに垂んとするに敗れたるは、時運固より然るなり。若し乃ち之に逼るに威を以てし、之を劫かすに兵を以てすれば、則ち攻取の事なり。速やかならんと欲するの功を求め、燕・齊の士をして、血を二城の間に流さしめ、殺傷の残を侈にし、四國の人に示さば、是れ暴を縱にして乱に易わり、貪りて以て私を成す。隣國之を望むこと、其れ猶お豺虎のごとくならん。既に大いに兵を称ぐるの義を墮とし、弱きを濟うの仁を喪い、齊士の節を虧き、廉善の風を廃し、宏通の度を掩い、

王徳の隆を(棄つれば)、二城拔く可きに幾しと雖も、霸王の事は、逝きて其れ遠し矣。然れば則ち燕は齊を兼わすと雖も、其れ世主と、何ぞ以て殊ならん哉。其れ隣敵を、何を以てか相傾けん。樂生、豈に二城を抜くの速なるを知らざらん哉。城抜きて業の乖らんことを願うならん。豈に速やかならざるの変を致すを知らざらん。業乖けば変と同じと願うならん。是に由りて之を言えは、樂生の二城を屠らざるは、其れ亦た未だ量る可からざる也。永和四年十二月二十四日、書して官奴に付す。

王徳之隆雖二城幾於可拔霸王之事逝其

遠矣然則燕雖兼齊其與世主何以殊哉其

與鄰敵何以相傾樂生豈不知拔二城之速

了我願城拔而業乖豈不知不速之致變

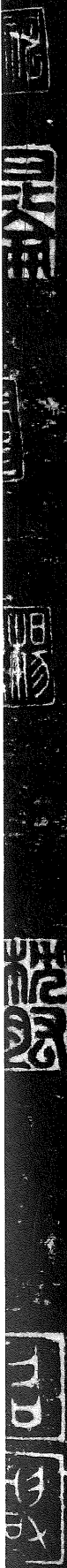
願業乖與變同由是言之樂生不屠二城其

亦未可量也



昇 僧 權

永和四年十二月二十四日 書付官奴



黄庭經

上有黄庭下關元後有幽關前有命嘯吸癩外出
 入丹田審能行之可長存黄庭中人衣朱衣關門壯籥
 蓋兩扉幽關俠之高魏々丹田之中精氣微玉池清水上
 生此靈根堅志不衰中池有土服赤朱橫下三寸神所居
 中外相距重閉之神癩之中務脩治玄雍氣管受精符
 急固守精以自持宅中有士常衣絳子能見之可不病橫
 理長尺約其上子能守之可無恙呼噏廬間以自償保守

黄庭經。上に黄庭、下に関元有り。後に幽關、前に命門有り。廬外に嘯吸し、丹田に入る。審らかに能く之を行なえば長存す可し。黄庭中人は朱衣を衣、関門壯籥は両扉に蓋わる。幽關之を俠んで高くして魏々たり。丹田の中精氣微なり、玉池の清水、上に肥を生じ、靈根堅固にして志衰えず、中池に土有り赤朱を服す。横下三寸は神の居る所。中外相い距て重ねて之を閉じ、神廬の中務めて脩治す。玄雍の氣管、精を受くるの符、急に子が精を固めて以て自持せよ。宅中に土有り常に絳を衣る。子能く之を見れば病まざる可し。横理の長尺、其の上を約す。子能く之を守らば恙無かる可し。廬間に呼噏し以て自ら償い、

〔保守〕完堅ならば身慶を受く。方寸の中蓋蔵を謹み、精神還歸すれば老いて復た壮なり。狭むに幽關を以てし流下して竟く。子が玉樹を養いて扶杖く可からしむ。至道は煩ならず旁迂ならず。靈台は天に通じ中野に臨む。方寸の中関下に至り、玉房の中神の門戸、既に是の公子我に教うる者なり。明堂四達すれば法海眞源なり。真人子丹我が前に当たり、三関の間精氣深し。子死せざらんと欲せば崑崙を脩めよ、絳宮重樓十二級、宮室の中五采集まり、赤神の子中池に立つ。下に長城玄谷の邑有り、長生要眇房中急なり。淫欲を棄指して子守が精を専らにし、寸田尺宅生を治す可し。子の長流するを繫げば志は安寧。觀志流神三奇靈、閑暇事無く心は太平。常に玉房を存すれば視明達。時に大倉を念えば飢渴せず。六丁を役使して神女に調し、

完堅身受慶方寸之中謹蓋蔵精神還歸老復壯俠
以幽關流下竟養子玉樹不可杖至道不煩不旁迂
靈臺通天臨中野方寸之中至關下玉房之中神門戶
既是公子教我者明堂四達法海源真人子丹當我前
三關之間精氣深子欲不死脩崑崙絳宮重樓十二級
宮室之中五采集赤神之子中池立下有長城玄谷邑長
生要眇房中急棄指淫欲專守精寸田尺宅可治生繫
子長流志安寧觀志流神三奇靈閑暇無事心太平
常存玉房視明達時念大倉不飢渴役使六丁神女

謂開子精路可長活正室之中神所居洗心自治無敢
 汙應觀五藏視節度六府脩治潔如素虛無自然道
 之故物有自然事不煩垂拱無為心自安體虛無之居
 在廉間寂莫曠然口不言恬淡無為遊德園積精香
 潔玉女存作道憂柔身獨居扶養性命守虛無恬淡
 無為何思慮羽翼以成正扶疏長生久視乃飛去五行
 參差同根節三五合氣要本一誰與共之升日月抱珠
 懷玉和子室子自有之持無失即得不死藏金室出月
 八曰是吾道天七地三回相守升降五行一合九玉石落是

子が精路を開きさは長活す可し。正室の中神の居る所。洗心自ら治めて敢えて汚るる無く。五藏を歴観して節度を視よ。六府を脩治して潔きこと素の如し。虚無自然は道の故なり。物に自然有れば事は煩ならず。垂拱無為なれば心自ずから安し。(体虚無の居は廉間に在り。寂莫曠然として口は言わず。恬淡無為にして徳園に遊び。精を積み香潔ければ玉女存す。道を作して憂柔身は独居。性命を扶養して虚無を守り。恬淡無為。何の思慮ぞ。羽翼以に成らば正に扶疏。長生久視して乃ち飛去せん。五行参差なるも根節を同じうし。三五氣に合するも本の一なるを要す。誰か与に之を共にして日月に升らん。珠を抱き玉を懐きて子が室に和し。子自らの之を有して持して失う無かれ。即し死せざらんと欲(得)せば金室に藏せよ。月を出だし日を入る是れ吾が道。天七地三回りて相い守る。五行に升降して一は九に合し。玉石落々たるも是れ(吾が玉)。

子自ら之を有して何ぞ守らざる。心に根蒂を暁りて華采を養い、天に服し地に順ひ合に精を蔵すべし。七日の奇、吾れ相(合)を連ぬ。崑崙の性、迷誤せず。九源の山河
 ぞ亭々たる。中に真人有り使令す可し。蔽うに紫宮丹城樓を以てし、俠むに日月の明珠の如くなるを以てす。萬歲昭々として期有るに非ず。外は三陽に本づき、神自ら
 来たり、内は三神を養い長生す可し。魂は天に上らんと欲し魄は淵に入らんとす。還魂反魄は道の自然なり。機を旋し珠を懸け環に端無し。(玉)石戸金籥身は完堅。載
 地玄天、乾坤に廻り、象るに四時を以てし赤きこと丹の如し。前は仰ぎ後は申く各々の門を異にす。送るに還丹と玄泉とを以てし、象龜氣を引き靈根を致す。中に真人
 有り金巾を巾し、甲を負い符を持して七門を開く。此れ枝葉に非ず、實は是れ根なり。昼夜之を思えば長存す可し、仙人道士は神とす可きに非ず。積精の(致す)所

吾寶子自有之何不守心曉根蒂養華采服天順地
 合藏精七日之奇五連相合崑崙之性不迷誤九源之
 山何亭々中有真人可使令蔽以紫宮丹城樓俠以日月
 如明珠萬歲昭々非有期外本三陽神自来内養三神
 可長生魂欲上天魄入淵還魂反魄道自然旋璣懸珠
 環無端玉石戸金籥身完堅載地玄天迴乾坤象以四
 時赤如丹前仰後卑各異門送以還丹與玄泉象龜引
 氣致靈根中有真人巾金巾負甲持符明七門此非枝
 葉實是根晝夜思之可長存仙人道士不可神積精所

或為專年人皆食穀與五味獨食大和陰陽氣故能不
 死天相既心為國主五藏王受意動靜氣得行道自守
 我精神光晝日昭々夜自守渴自得飲飲自飽經歷六
 府藏外酉轉陽之陰藏於九常能行之不知老疢之
 為氣調且長羅列五藏生三光上合三焦道飲增液我
 神魂魄在中央隨鼻上下知肥香立於懸壺通明堂
 伏於玄門候天道近在於身還自守精神上下關分
 理通利天地長生道七孔已通不知老還坐陰陽天門
 候陰陽下于寵喉通神明過華蓋下清且涼入清冷

專仁(年)に和(為)し、人皆な穀と五味とを食うに、独り大和陰陽の氣を食う。故に能く死せず天相既きたり。心は国主と為り五藏の王。意を受けて動靜すれば氣行くと得、道自ら我を守り、精神光き、昼日昭々として夜は自ら守る。渴すれば自ら飲を得、飢うれば自ら飽く。六府を経歴して卯酉に蔵し、陽を転じて陰に之きて九に蔵す。常に能く之を行なえば老を知らず。肝の氣為るや調にして且つ長し、五藏を羅列して三光を生ず。上は三焦に合し道に壺を飲み、我が神の魂魄中央に在り。鼻に随い上して肥香を知り、懸壺に立ちて明堂に通ず。玄門に伏して天道を候い、近くは身に在りて還た自ら守る。精神上下して分理を開(関)き、利を天地に通ず長生の道。七孔已に通じて老を知らず。還た(陰陽)天門に坐して陰陽を候い、寵喉に下りて神明に通じ、華蓋の下を過ぎて清くして且つ涼し。

〔清冷の淵に〕入りて吾が形を見、期して還丹を成さば長生す可し。下〔還〕に華蓋池有〔過〕り動きて精を見腎、明堂に立ちて丹田に臨む。將に諸神をして命門を開か
しめ、利を天道に通じて靈根に至る。陰陽列布して流星の如し。肺の氣為るや三焦より起り、上は天門に服伏して故道を候い、天地を闚視して童子を存す。精華を
調和して髮齒を理え、顔色潤沢にして復た白からず。嚙喉に下りて何ぞ落々たる、諸神皆な会して相い求索す。下に絳宮紫華の色有り。隱に華蓋在りて六合〔神慮〕に通
じ、専ら諸〔心〕神を守りて転た相い呼ぶ。我が諸神を觀て邪〔邪〕を辟除す。脾神還帰して大家に依り、胃管に至りて虚無に通じ、命門を閉塞すること玉都の如し。寿は
萬歳を専らにし將に餘有らんとし、脾中の神は中宮に舍り、上は命門に伏して明堂を合し、利を六府に通じて五行を調え、金木水火は土を王と為す。日月列宿〔陰陽を
張り〕、

淵見吾形期成還丹可長生還過華池動腎精立於明
堂臨丹田將使諸神開命門通利天道至靈根陰陽
列帝如流星肺之為氣三焦起上眼伏天門候故道闚
視天地存童子調和精華理髮齒頰色潤澤不復白
下于嚙喉何落し諸神皆會相求索下有絳宮紫華
色隱在華蓋通神靈專守心神轉相呼觀我諸神辟
除耶脾神還歸依大家至於胃管通虛無閉塞命門
如玉都壽專萬歲將有餘脾中之神舍中宮上伏命
門合明堂通利六府調五行金木水火土為王日月列宿

張陰陽二神相得下玉英五藏為主腎最尊伏於大陰
 成其形出入二竅舍黃庭呼吸虛無見吾形強我筋骨
 血脉盛恍惚不見過清靈恬惓無欲遂得生還於七
 門欽大淵導我玄雍過清靈問我仙道與竒方頭載
 白素距丹田沐浴華池生靈根被髮行之可長存三府
 相得開命門五味皆至開善氣還常能行之可長生

永和十二年五月廿四日五山陰縣寫

二神相い得て玉英を下す。五藏の主為る腎最も尊く、大陰に伏して其の形を蔵(成)し、二竅に出入して黄庭に舍る。廬間(虚無)に呼吸して吾が形を見、我が筋骨を強くせば血脉盛んなり。恍惚として清靈を過ぎるを見ず。恬惓無欲遂に生を得、七門に還りて大淵に飲む。我が玄雍を導いて清靈を過り、我に仙道と竒方とを問う。頭に白素を載せ丹田を距て、華池に沐浴して靈根を生じ、被髮して之を行なえば長存す可し。二(三)府相い得て命門を開く。五味皆な至(開)りて善氣還り、常に能く之を行なえば長生す可し。 永和十二年五月二十五(四)日、山陰県に写す。

寡情平原厭次人也魏建安中分次以又為郡
 人焉先生事漢武帝漢書具載瑋博達思周變
 通以為濁世不可以富位苟出不以直道也故傾抗
 以傲世不可以垂訓故正諫
 故談諧以取容潔其道而其跡清其所負而
 不為耶進退而不離羣若乃
 博物觸類多能合變以明讚以知來典
 八素九丘陰陽晷緯之學百家衆流之論周給敏
 捷之辨枝離覆逆之數經脉藥石之藝射御書

(大夫の諱は朔、字は曼倩、平原厭次の人也。魏の建安中、厭次を分かち以て(樂陵郡と為す。故に)又た郡人為り焉。(先生)漢の武帝に事う。漢書(其の事を)具載す。
 (先生は)環瑋博達、思いは周く變通し、以為えらく濁世は以て富貴なる可からざる也。(故に)薄遊して以て位を取る。苟しくも出づるも以て道を直くす可からざる也、
 故に傾抗して以て世に傲る。世に傲れば以て訓を垂る可からざる也。故に正諫して(以て)節を明らかにす。節を明らかにすれば、以て久しく安んず可からざる也、故に談
 (談)諧して以て容れられんことを取る。其の道を潔くして其の跡を穢し、其の質を清くして其の文を濁す。弛張して邪(耶)を為さず、進退して群を離れず。乃ち遠
 心曠度、瞻智宏材、個儻にして)物に博く、類に触れて多能なるが若きは、變に合して以て算に明らかに幽かに讚けて以て來を知る。三墳・五典・八索(素)・九丘、陰陽
 圖緯の学、百家衆流の論、周給敏捷の辨、支(枝)離覆逆の數、經脈藥石の藝、射御書(計の術)自り、

計之術乃研精而究其理不習而盡其巧經目而諷
 於口過耳而闇於心夫其明濟開豁苞含弘大凌
 轢鄉相譏吟豪桀戲萬乘若窻友視疇列如草
 芥雄節邁倫高氣盖世可謂拔乎其萃遊方之
 外者也談者又以先生噓吸冲私吐故納新蟬蛻龍
 變棄世登仙神交造化靈為星辰此又竒恠恍惚
 不可倫論者也大人來此國僕自京都言歸定省
 覩先生之縣邑想 之高風徘徊路寢見先生之
 遺像逍遙城郭覩 生之祠宇慨然有懷乃作

乃ち精を研みて其の理を究め、習わずして其の功(巧)を尽くし、目を経て口に諷し、耳を過ぎて心に闇んず。夫れ其の明濟の開豁、包苞含の弘大は、卿相を凌轢し、
 豪桀を嘲哂(譏吟)し、(籠罩して)前塵く、貴勢を踏藉す。出でては休顯ならず、賤しきも愛感せず。萬乗と戯るは窻友の若く、儔(疇)列を視るは草芥の如し。雄節は倫
 に邁ぎ、高氣は世を蓋う。其の萃より抜け、方の外に遊ぶ者と謂う可き也。談者又た以えらく、先生は冲和(冲私)を噓吸し、故を吐き新を納れ、蟬蛻龍變、(俗)世を棄
 てて登仙し、神は造化に交わり、靈は星辰と為ると。此れ又た奇恠恍惚、備に論ず可からざる者也。大人來たりて此の國に守たり。僕は京都自ら言に帰りて定省す。先
 生の眞邑を覩て、先生の高風を想い、路寢に徘徊して、先生の遺像を見る。城郭を逍遙して、先生の祠宇を觀、慨然として懷有り。乃ち(頌)目を作る。

頌曰其辭曰

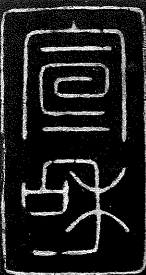
矯：先生肥遁居貞退弗終否退亦避榮臨世濯
 足稀古振纓涅而無滓既濁能清無滓伊何高
 明剋柔無能清伊何視渌若浮樂在必行處因
 憂跨世凌時遠蹈獨遊瞻望往代爰想遐蹤邈
 生其道猶龍染跡朝隱和而不同棲遲下位聊以
 從容我來自東言適茲邑敬問墟墳公佇原隰虛
 墓徒存精靈永戢民思其軌祠宇斯立徘徊寺
 寢遺像在畝周宇庭序荒蕪棟棟傾落草萊

其の辭に曰く、矯々たる先生、肥遁して貞に居る。退くも否に終わらず、進(退)むも亦た榮を避く。世に臨んで足を濯い、古を希(稀)んで纒を振るう。濯くして滓れ
 無く、既に濁るも能く清し。滓れ無きは伊れ何ぞ、高明剋く柔なればなり。(無)能く清むは伊れ何ぞ、汚を視ること浮の若ければなり。樂しみ在れば必ず行ない、儉に
 処るも憂うる罔し。世に跨がり時を凌ぎ、遠く蹈んで独り遊ぶ。往代を瞻望し、爰に遐蹤を想う。邈々たる先生、其の道は猶お龍のごとし。跡を朝隱に染め、和して同
 せず。下位に棲遲し、聊か以て從容す。我れ東より来たり、言に茲の邑に適く。敬んで墟墳を問ひ、原隰に企佇す。墟(虚)墓は徒らに存し、精靈は永く戢る。民は其の
 軌を思い、祠宇斯に立つ。寺寢に徘徊すれば、遺像は因に在り。祠宇を周旋すれば、庭序は荒蕪す。棟棟は傾き落ち、草萊は(除かれず)。

弗除肅、先生豈焉是居、弗刑遊、我情昔在有
徳罔不遺靈天秩有禮 鑒孔明仿佛風塵用垂頌
聲

永和十二年五月十三日書與王敬仁

此意人臨右軍畫帑



肅々たる先生、豈に焉んぞ是れ居らんや。是に居るも形刑われず、悠々遊々たる我が情。昔有徳に在りては、靈を遺さざるは罔し。天秩は礼有り、神鑑は孔だ明らかなり。風塵を彷彿し、用て頌声を垂る。永和十二年五月十三日、書して王敬仁に与う。

孝女曹娥者上虞曹盱之女也其先與周同禮末曹
 荒沈爰來適居盱能撫節安歌婆婆樂神以漢安
 二年五月時迎伍君逆濤而上為水所淹不得其屍
 時娥年十四晝暮思盱夜吟澤畔旬有七日遂自投
 江死經五日抱父屍出以漢安迄于元嘉元年青龍
 在辛卯莫之有表度尚設祭之誄之辭曰
 伊惟孝女擘擘之姿偏其返而令色孔儀窈窕淵

孝女曹娥なる者は、上虞の曹盱の女也。其の先は周と祖を同じうす。末曹荒沈し、爰に來たりて適居す。盱は能く節を撫し歌を安じ、婆婆して神を樂しましむ。漢安二
 年五月、時に伍君を迎え、濤を逆えて上るを以て、水の淹す所と為り、其の屍を得ず。時に娥は年十四、号慕して盱を思い、沢畔に哀吟す。旬有七日、遂に自ら江に投
 じて死す。五日を経て、父の屍を抱きて出づ。漢安より元嘉元年、青龍、辛卯に在るに迄るも、之を表する有る莫きを以て、度尚設けて之を祭り、之を誄す。辭に曰く、
 伊れ惟の孝女、擘々の姿、偏として其れ返り、令色孔た儀し。窈窕たる淑(女)、

女巧咲倩子宜其家室在冷之陽待禮未施嗟喪
 蒼伊何無父孰怙訴神告哀赴江永號視死如歸
 是以眇然輕絕投入沙泥翩孝女乍沈乍浮或泊
 洲與或在中深或趨湍瀨或還波濤千夫共聲悼
 痛萬餘觀者填道雲集路衢淚淚掩涕驚慟國都
 是以復羨笑市祀崩城隅或有剋面引鏡斲耳用
 刀坐臺待水抱樹而燒於戲孝女德茂此傳何者

巧咲倩たり。其の家室に宜し、冷の陽に在るも、礼を待ちて未だ施さず。嗟、慈父を喪う、彼の蒼は伊れ何ぞや、父無くば孰か怙まん、神に訴えて哀を告げ、江に赴き永く号び、死を視ること帰するが如し。是を以て眇然として輕絶し、沙泥に投入す。翩々たる孝女、乍ち沈み乍ち浮かび、或いは洲嶼に泊し、或いは中流に在り、或いは湍瀨に趨き、或いは波濤に還る。千夫、声を失い、悼痛するは萬餘。觀る者は道を填め、路衢に雲集し、涙を流し涕を掩い、國都を驚慟す。是を以て哀羨は市に哭き、祀は城隅を崩す。或いは面を剋して鏡を引き、耳を斲くに刀を用い、台に坐して水を待ち、樹を抱きて焼かる有り。於戲孝女、徳は此の傳より茂んなり。

〔何となれ者〕 大国 防礼して自ら脩む。豈に況んや庶賤 露屋草茅なり。扶けずして自ずから直く、鏤せずして雕せらる。梁を越え宋を過ぎ、之に比すれば殊なる有り。此の貞厲を哀しむは、千載に渝わらず。嗚呼 哀しい哉。 辞(乱)に曰く、 銘は金石に勒し、之を乾坤に質す。歳数曆祀し、丘墓に墳を起す。后土に光き、天人を顕照す。生は賤しく死は貴し、義の利門なり。何ぞ恨まん 華落ち、雕零して早く分かるを。葩は艶にして窈窕 永世 神に配す。堯の二女の、湘夫人と為るが若し。時に 仿佛を効し、以て後昆に昭(招)らかにせよ。

夫國防禮自脩豈况庶賤露屋草茅不扶自直不鏤而雕越梁過宋比之有殊哀此貞厲千載不俞嗚呼哀哉亂曰
 銘勒金石質之乾坤歲數曆祀丘墓起墳光于后土顯照天人生賤死貴義之利門何悵華落雕零早分葩艷窈窕永世配神若堯二女為湘夫人時效彷彿以招後昆

漢議郎蔡雍聞之來觀夜闇手摸其文而讀之
雍題文云

黃絹幼婦外孫齋曰又云

三百年後碑冢當隨不隨逢王匡

昇平二年八月十五日記之

漢の議郎蔡雍、之を聞き來たり觀るも、夜は闇なり、手もて其の文を摸して之を読む。雍は文に題して云う、黃絹幼婦、外孫齋曰と。又た云う、三百年後、碑冢は當に江中に墮つべし、當に墮つべきに墮ちざれば、王匡に逢わんと。昇平二年八月十五日、之を記す。

嬉左倚采旄右蔭桂棋攘皓腕於神許予採湍瀨
 之玄芝余情悅其澍美予心辰蕩而不悟無良媒以接
 歡于託微波以通辭願誠素之先達予解玉珮以要之
 嗟佳人之信脩予羌習禮而明詩抗瓊瑋以和予予
 指潛淵而為期執拳之款實予懼斯靈之我其
 感交甫之棄言悵猶豫而狐疑收和頽以靜志予
 申禮防以自持於是洛靈感焉從倚仿徨神光離
 合乍陰乍陽擢輕軀以鶴立若將飛飛而未翔蹇

……嬉しむ。左に采旄に倚り、右に桂旗に蔭れ、皓腕を神澗に攘わし、湍瀨の玄芝を採る。余が情は其の淑美を悦び、心は振蕩して怡らがず。良媒の以て敏を接する無ければ、微波に託して以て辞を通ず。誠素の先ず達せんことを願ひ、玉珮を解いて以て之を要む。嗟、佳人の信脩なる、羌、礼に習い詩に明らかなり。瓊瑋を拵けて以て予に和し、潜淵を指して期と為す。拳々の款美を執り、斯の靈の我を欺くを懼る。交甫の言を棄てられしに感じ、悵として猶豫し狐疑す。和頽を収めて以て志を静め、礼防を申べて以て自ら持す。是に於いて洛靈焉に感じ、徙從倚仿徨し、神光離合し、乍ち陰く乍ち陽る、輕軀を擢んで以て鶴のごとく立ち、將に(飛)飛ばんとして未だ翔らざるが若し。

封塗之郁烈于步
 衡薄而流芳超長吟以慕遠于
 聲哀厲而彌長爾迺眾靈雜遝命疇嘯侶或
 獻清流或翔神渚或採明珠或拾翠羽從南湘之
 二姚于携漢濱之遊女歎姮媧之無匹于詠李牛
 之獨處揚輕袿之倚靡于翳脩袖以延佇體迅飛

子敬好寫洛神幾人間答有數本此其一也
 寶曆元年正月廿四日起居郎柳權記



椒塗の郁烈を(踐み)、衡薄に歩いて芳を流す。超として長吟し以て遠きを慕い、声は哀厲にして弥いよ長し。爾して迺す眾靈雜遝し、倚(嘯)に命じ侶に嘯き、或いは清
 流に戯れ、或いは神渚に翔る。或いは明珠を採り、或いは翠羽を拾い、南湘の二妃(姚)を従え、漢濱の遊女を携う。姮媧の匹無きを歎じ、牽牛の独り処るを詠ず。輕袿
 の倚靡たるを揚げ、脩袖を翳して以て延佇す。体は飛(鳧よりも)迅く……

唐歐陽詢書

般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見
五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空
空不異色色即是空空即是色受想行識

亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅
不垢不淨不增不減是故空中無色無受
想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸
法無眼界乃至無意識界無無明亦無無
明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅
道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依

般若波羅蜜多心經。 觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ぜし時、五蘊 皆な空なりと照見し、一切の苦厄を度す。 舍利子よ、色は空に異ならず、空は色に異ならず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識も、亦た復た是の如し。舍利子よ、是の諸法は空相にして、生ぜず滅せず、垢つかず淨からず。増さず減せず、是れ故に 空中に色無く、受想行識無く、眼耳鼻舌身意無く、色声香味触法無し。眼界無く、乃至は意識界無し。無明無く、亦た無明の尽くる無し。乃至 老死無く、亦た老死の尽くる無し。苦集滅道無く、智無く亦た得も無し。得る所無きを以ての故に。菩提薩埵は、

般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無
 有恐怖遠離顛倒夢想究竟涅槃三世諸
 佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐
 三菩提故知般若波羅蜜多是大神呪是
 大明呪是無上呪是無等等呪能除一切
 苦真實不虛故說般若波羅蜜多呪即說

呪曰

揭帝揭帝

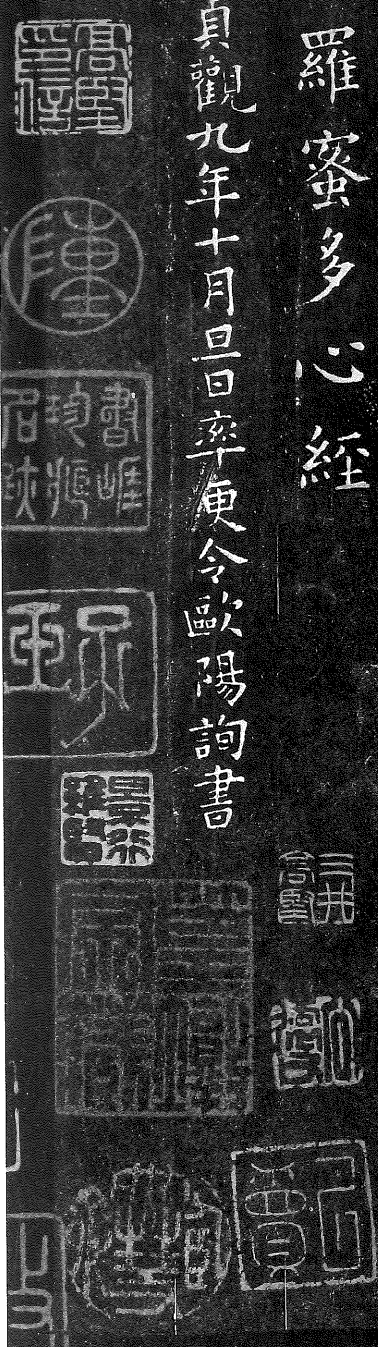
波羅揭帝

波羅僧揭帝

菩提薩婆訶

般若波羅蜜多心經

貞觀九年十月旦日率更令歐陽詢書



般若波羅蜜多に〔依る〕故に、心に罣礙無し。罣礙無きが故に、恐怖有る無し。顛倒夢想を遠離し、涅槃を究竟す。三世の諸仏も、般若波羅蜜多に依る故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。故に知る 般若波羅蜜多は、是れ大神呪、是れ大明呪、是れ無上呪、是れ無等等呪なるを。能く一切の苦を除き、真実にして虚ならざる故に、般若波羅蜜多の呪を説く。即ち呪を説きて曰く、
 揭帝揭帝、波羅揭帝、波羅僧揭帝、菩提薩婆訶。 般若波羅蜜多心經。
 貞觀九年十月旦日、率更令歐陽詢書す。

佛說尊勝陀羅尼呪
 那謨薄伽跋帝。啼隸路迦。鉢羅底毗失瑟吒耶。
 勃陀耶。薄伽跋帝。怛姪他嚩。毗輸馱耶。
 娑摩三漫多幡娑娑。娑破囉拏。揭底伽訶那娑婆嚩。輸地。阿鼻洗者。蘇揭多伐折那。阿蜜唎多毗曠雞。阿訶羅阿訶羅。阿瑜散陀羅尼。輸馱耶輸馱耶。伽伽那毗輸提。烏瑟尼沙毗逝耶輸提。娑訶娑囉喝囉濕弭。珊瑚地帝。薩婆怛揭多地瑟吒那頰地瑟恥帝。慕嚩隸。拔折囉迦耶僧訶多那輸

佛說尊勝陀羅尼呪。 那謨薄伽跋帝。啼隸路迦。鉢羅底毗失瑟吒耶。勃陀耶。薄伽跋帝。怛姪他嚩。毗輸馱耶。娑摩三漫多幡娑娑。娑破囉拏。揭底伽訶那娑婆嚩。輸地。阿鼻洗者。蘇揭多伐折那。阿蜜唎多毗曠雞。阿訶羅阿訶羅。阿瑜散陀羅尼。輸馱耶輸馱耶。伽伽那毗輸提。烏瑟尼沙毗逝耶輸提。娑訶娑囉喝囉濕弭。珊瑚地帝。薩婆怛揭多地瑟吒那頰地瑟恥帝。慕嚩隸。拔折囉迦耶僧訶多那輸

提薩婆伐囉字毗輸提鉢囉底你伐怛耶阿瑜
 輸提薩末那頰地瑟恥帝末你末你怛闍多部
 多俱毘鉢利輸提毗薩普吒勃地輸提社耶社
 耶毗社耶薩末囉薩末囉勃陀頰地瑟耶多輸
 耶多輸提跋折嚩跋折囉揭鞞跋折藍婆伐耶
 麼麼薩婆薩埵那迦耶毗輸提薩婆揭底鉢可
 輸提薩婆以他揭多三摩濕婆娑頰地瑟耶
 勃啞勃姐蒲馱耶蒲馱耶三漫多鉢唎輸提
 婆怛他揭多地瑟吃那頰地瑟恥帝娑婆訶

提。薩婆伐囉字毗輸提。鉢囉底你伐怛耶。阿瑜輸提。薩末那頰地瑟恥帝。末你末你怛闍多部多俱毘鉢唎輸提。毗
 薩普吒勃地輸提。社耶社耶毗社耶毗社耶。薩末囉薩末囉。勃陀頰地瑟耶多輸提。跋折嚩跋折囉揭鞞跋折藍。婆伐
 都麼麼薩婆薩埵那。迦耶毗輸提。薩婆揭底鉢唎輸提。薩婆 他揭多三摩濕婆娑頰地瑟耶帝。勃啞勃姐蒲馱耶蒲馱
 耶。三漫多鉢唎輸提。薩婆怛他揭多地瑟吃那頰地瑟恥帝娑婆訶。

破邪論序

太子中書舍人吳郡虞世南撰并書

若夫神妙無方非籌算能測至理凝退豈繩准所

知寔乃常道無言有崖斯絕安可憑諸天縱窺其

窅冥者乎至如五門六度之源半字一乘之教九

流百氏之目三洞四檢之文苟可以經緯闡其圖

詎可以心力到其境者英猷茂實代有人焉法師

俗姓陳潁川人晉司空群之後自梁及陳世傳纓

冕爰祖庾伯累業儒宗法師少學三論名聞朝野

長該衆典聲振殊俗威儀肅穆介節淹通留連

破邪論序。太子中書舍人・吳郡・虞世南撰并書す。夫の神妙の無方たるが若きは、籌算の能く測るに非ず。至理の凝退たるがときは、豈に繩準(准)の知る所ならんや。寔に乃ち常道は言う無く、崖有りて斯ち絶たる、安んぞ諸もろの天縱に憑りて、其の窅冥なる者を窺う可けん乎。五門六度の源、半字一乗の教、九流百氏の目、三洞四檢の文の如きに至りては、苟しくも經緯を以て其の圖を闡らかにす可きも、詎に心力を以て其の境に到る可き者ならんや。英猷茂實、代よに人有り焉。法師俗姓は陳、潁川の人、晉の司空群の後なり。梁自り陳に及び、世よ纓冕を伝う。爰に祖より伯に邁り、累ねて儒宗を業とす。法師少くして三論を学びて、名は朝野に聞こえ、長じて衆典を該ねて、声は殊俗に振るう。威儀肅穆にして、介節淹く通じ、

清翰發擿微隱比地方春測海道亞彌天豈心操
 類山濤神侔庾亮而已余其廼用顯仁之量如愚
 若訥外闇內明之巧固能智同文情乃典而不野
 麗而有則猶八音之並奏等五色以相宣道行
 則納心見於三空極群生於八苦既學博而心下
 亦守卑而調高實釋種之樛棟至人之羽儀者
 矣加以賑乏扶危先人後己重風光之拂照林壑
 愛山水之負帶煙霞願力是融晦迹肥遁以隋開
 皇之末隱於青溪山之鬼峪洞焉迥構巖崖蔽
 虧日月空飛戶牖則吐納風雲其間採五芝而偃

清翰に〔留連〕して、微隱を發擿す。地に比べ春に方ぶ、蔵(酒)用頸仁の量。愚なるが如く訥なるが若し、外闇内
 明の巧。固より能く智は測海に同じく、道は弥天に垂ぐ。豈に止だに操は山濤に類し、神は庾亮に侔しき而已な
 らんや。爾れ其の文情は、乃ち典にして野ならず、麗にして則有り。猶お八音の並び奏せらるるがごとく、五色
 以て相い宣するに等し。道行は則ち正見を三空に納め、群生を八苦より拯う。既に学博くして心下り、亦た卑を
 守りて調高し。実に釈種の樛棟、至人の羽儀たる者なり。加うるに以て乏しきを賑わし危うきを扶け、人を先に
 し己を後にす。風光の林壑を払照するを重んじ、山水の煙霞を負帯するを愛す。願力是に融り、迹を肥遁に晦ま
 す。隋の開皇の末を以て、青溪山の鬼峪洞に隠る焉。迥かに巖崖に構うれば、則ち日月を蔽虧し、空に戸牖を飛
 ばせば、則ち風雲を吐納す。其の間に五芝を採りて偃〔仰〕し、

破邪論序

太子中書舍人吳郡虞世南撰并書

若夫神妙無方非籌算能測至理凝退豈繩准所

知寔乃常道無言有崖斯絕安可憑諸天縱窺其

窅冥者乎至如五門六度之源半字一乘之教九

流百氏之目三洞四檢之文苟可以經緯闡其圖

詎可以心力到其境者英猷茂實代有人焉法師

俗姓陳潁川人晉司空群之後自梁及陳世傳纓

冕爰祖庾伯累業儒宗法師少學三論名聞朝野

長該衆典聲振殊俗威儀肅穆介節淹通留連

破邪論序。太子中書舍人・吳郡・虞世南撰し并びに書す。夫の神妙の無方たるが若きは、籌算の能く測るに非ず。至理の凝退たるがときは、豈に繩準(准)の知る所ならんや。寔に乃ち常道は言う無く、崖有りて斯ち絶たる、安んぞ諸もろの天縱に憑りて、其の窅冥なる者を窺う可けん乎。五門六度の源、半字一乗の教、九流百氏の目、三洞四檢の文の如きに至りては、苟しくも經緯を以て其の図を闡らかにす可きも、詎に心力を以て其の境に到る可き者ならんや。英猷茂實、代よに人有り焉。法師俗姓は陳、潁川の人、晋の司空群の後なり。梁自り陳に及び、世よ纓冕を伝う。爰に祖より伯に迺り、累ねて儒宗を業とす。法師少くして三論を学びて、名は朝野に聞こえ、長じて衆典を該ねて、声は殊俗に振るう。威儀肅穆にして、介節淹く通じ、